

ロスト・コスモノート

作 小阿瀬達基

登場人物

目羅……………高校教師。故人。

本編「ロスト・コスモノート」

幕間劇「蓋をあける」

鏡……………高校三年。

京子……………大学生。

絵筆……………高校三年。天文部員。

エリカ……………京子の友人。

らこ……………高校三年。天文部員。

男……………京子と知り合った男。

部長……………高校三年。天文部部长。

まどか……………高校三年。天文部員。

電話先輩……………引きこもり。らこの兄。

千葉県郊外の地方都市にある、とある高校を

加部……………麻薬取締官。

舞台に展開する。時は1997年の6月末。

医者……………絵筆の主治医。

第1幕

第1場 一九八九年

第2場 一九九九年

第3場 天文部

第4場 篠崎絵筆

第5場 十日前、六月十四日

幕間劇 蓋を開ける

第2幕

第6場 ホットケーキⅡパンケーキ

第7場 ↓エレベーター

第8場 ↑ロケット

第9場 発射のあと

第10場 失われた宇宙飛行士

カーテンコール

第1幕

第0場 1989年

部屋の中心に医者が座っている。

時報『午前6時32分30秒をお知らせします』

時報『午前6時32分40秒をお知らせします』

時報『午前6時32分50秒をお知らせします』

時報『午前6時33分ちょうどをお知らせします』

ピッピッという時報の音が、少し

ずつ心電図に変わっていく。しばらく

くしたらピーツと鳴り、止まる。

医者「……起きたんだね。耳は聞こえる？眼は開くか

な」

医者「正面には誰かがいるらしい。」

医者「ああ……こっちだよ。こっち」

誰かは医者の方を向いた。

医者「聞こえはするみたいだね。さて……私の質問の答え

がイエスなら瞬き一回、ノーなら〇回……いいかな」

誰かは瞬きを2回した。

医者「自分の名前はわかる？生まれてから何年？貴女は

ここに自分の意志で来た？瞼の裏から誰かに見られてい

ると感じたことは？アレシボ・メッセージを最後に受信

したのはいつ？倫理原則を作動させた検索エンジンは理

想社会の存在する他宇宙をもう見つけた？……平気そう

だね。カーテン、開けようか。この街の月は大きいんだ

よ……月が大きい街には落とし物が集まるんだ。夜道で

財布を落としてもすぐに見つかるとはどう？」

カーテンが開き、部屋に青い光が差

し込む。

医者「どう、綺麗でしょ……まあいいや。結果を報告す

るね。えーと……松果体が活性化しすぎてる。……3.

8ルクスの光量照射はさすがに過剰だったね。ホルモン分泌も均衡が崩れてるし、メラトニンの濃度をもう5%

増やしても意味がない。これ以上の投薬はむしろ危険。

薬は使い続けると効果がなくなるんだから。髪について

はごめんね。でも……それはっかりは仕方ないの。染め

るのはおすすめしないな……貴女の場合、アレルギー反

応が出ちゃうと思うよ。それに……眼も悪くなって来て

るね」

医者、ため息をついて相手を見据える。

医者「結論から言うと、私たちは貴女をどうにも出来な

かった。今の時点ではね。それに、貴女がいる事自体よ

く思っていない人間が大勢いる。……もちろん、貴女に

責任は無いんだけど。……これから貴女の包帯も、薬

も、どんどん増えていく。だけど、それも許して欲し

い。……約束するよ、その代わり。あと10年で絶対

に、私たちは貴女をなんとかしてみせる……」

【第1場 1999年6月】

絵筆と鏡がいる。

絵筆「私の住んでいた街には何でもあるけど、何かがあるかと言えば何にもなくて。深夜になると、空いっぱい雲が暗くて濃い黄色に染まっていた。それを私は月のせいだと思っていたけれど、あれは、東京のビルの明かりが反射しているのだと、いつか、誰かに聞いた」

鏡「街には巨大なダムがあって、その底ではオットセイが一匹飼われているらしいと、いつか、誰かに聞いた。

ただの噂と思うかもしれないけど、確かに時々、そんな

鳴き声が聞こえている気がする。……そのダムに一昨

日、目羅……という、教師の死体が浮かんできたらし

い」

鏡、教室の机に突っ伏して寝てい

る。絵筆が鏡に近づき、鏡に呼びか

ける。

絵筆「鏡くん」

鏡、まだ寝ている。

絵筆「(さつきより少し大きな声で) 鏡くん」

鏡、起きる。まだぼんやりしている。

絵筆「鏡くんって……ピアノ弾けるよね」

鏡「え……? あ、うん……」

絵筆「弾いて欲しい。手本が聴きたくて。CDとか…売

ってないし」

鏡「えっ?」

絵筆「(楽譜と電子ピアノを渡しながら) この曲」

鏡「? ……いいけど。篠崎だよね。あの…その席の」

絵筆「……」

鏡「だよね……で、えっと、この曲?」

絵筆「……不安で」

鏡「何が?」

絵筆「最近、目が良く見えないから。楽譜ちゃんと追え

てるか、わからない」

鏡「あつ、へえ…」

絵筆「……」

鏡「あ、俺も……さ。忘れ物とか多くて」

絵筆「……そう」

鏡「あっ、関係ない……ね」

鏡、気まずさを誤魔化すように電子

ピアノを弾きだす。

絵筆「……この曲、知ってる？」

鏡「や、知らない。でも好き……かな。なんて曲？」

絵筆「！私も……私も好き。……名前は、知らない。曲

だけ、人から教わった」

鏡「へえ……」

絵筆「だから、上手く弾いて。聴いて欲しいの」

鏡「あっ、へえ……」

絵筆、電子ピアノと楽譜を持って教

室を出ていく。

鏡「もういいの？」

絵筆は戻ってこない。

鏡「……変だよな。篠崎……なんだっけ」

掃除用具のロッカーから勢いよく男

が飛び出してくる。

部長「篠崎絵筆がどうした！」

鏡「うわあー！」

部長「な、な……」

鏡「な、な……」

部長&鏡「なんで！」

鏡「なにがー？」

部長「なんであいつとあんなに会話できてるんだ」

鏡「なんでロッカーから出てきたんだよ」

部長「部長の俺ですらほとんど距離を詰められてないの

に……」

鏡「ねえ、なんでロッカーから出てきたんだ？」

部長「お前、部員でもないのに……」

鏡「なんでロッカーから……」

部長「すごいよ……すごい！お前あれだよな？絵筆と同

じクラスの！あ…同じ組だから？だから会話できるの

か？いやいや……知り合いか？……」

鏡「ロッカー……」

部長「なあ。ほんとに。知り合いなのか？」

鏡「いや……三年間同じクラスではあるけど、あんまり

喋ったことは無い、と思う」

部長「思う？」

鏡「最近忘れっぽくて」

部長「なんだそりゃ」

鏡「さっき何してたっけ、みたいな」

部長「へ〜……なあ、ちょっと今から暇か？」

鏡「……まあ」

部長「じゃあ来てくれ」

鏡「どこに？」

部長「天文部だ」

鏡「いや……なんで？」

部長「俺は今日、あのロッカーの中からずっとこの教室

を見ていた。誰か二言以上絵筆と会話をする人間がいな

いか、いたらそいつを天文部に引っ張ってこようと。

で、残念ながらそれは……お前だけだった」

鏡「だからなんで……っていうか俺、星の観察とかしたことないけど」

部長「俺たちもしないぞ」

鏡「天文部なのにな？」

部長「しない」

鏡「じゃあ、何を」

部長「うちの天文部は1999年7月16日に数名の有志

により同好会としてゲリラ的に発足して以来、ただ一つの目的の為に活動している。ロケット開発だ！！3

0年間、代々有人ロケットを開発し続けてる。それで遂に来週打ち上げる……予定だったんだが」

鏡「？」

部長「どうにも進捗がな。急遽スタッフが必要だ」

鏡「はあ」

部長「さあ、今から来てくれ！人が要るんだ！！」

部長、鏡の手を引っ張って教室から

連れ出そうとする。そこへ入ってくる医者。

医者「あ」

部長「あ？」

医者「（鏡を指差して）鈴原、鏡」

部長「お前、そんな名前なのか」

鏡「うん」

医者「探してたんだよね、君」

部長「何部だ？こいつはやらんぞ、天文部のもんだ」

医者「聞きたいことあってさ。……目羅のこと、知って

る？」

鏡「目羅先生……何日か前に、ダムで死体になって見つ

かって……自殺か他殺かは、不明って」

医者「どうだろうね。あ、ねえ……舌出して」

困惑する鏡。

医者「ほら、良いから」

鏡、部長に視線をやるも知らんとい

う表情。鏡、舌を出す。医者がアイ

スの棒のようなものを取り出して、

鏡の舌をやや勢いよくこする。

鏡「痛っっ!!!何すか!？」

医者「ごめんごめん……あ、もういいよ」

医者、座って今度は部長に向き直

る。棒に小さいスポイトのようなも

のから薬を垂らし、そのまま部長に

話しかける。

医者「彼、天文部入るの？」

部長「ああ、今日からな。もうどこの部にもやらんぞ？」

絵筆と仲良い、sonだけで逸材だ」

医者「仲良いんだ」

鏡「いや、別に……」

部長「仲良いだろ!あいつがあんなに人と喋ってるの初

めて見たぞ!」

鏡「だから別に、仲良くは……」

医者「絵筆ちゃんのことよろしくね?」

鏡「?」

医者「あたし、絵筆ちゃんの主治医だから。あの子と仲良くしてあげて。ほら、仲良くしに行つてーほらー部活

行つて！ほいほいほい！」

部長「ほいほいほいほいほい！」

医者、鏡を教室から押し出す。部長

も一緒に押し出し、去る。

加部が入ってくる。

加部「……ここにいたんですか。やめてください、勝手に

にウロウロするの……」

医者「あ！いなくならなくてよかったじゃん」

加部「勝手に消えたのはそっちでしょう。……で？」

医者「陽性だね」

加部、満足そうな顔。

加部「回収します」

医者「どーぞ。あと、言われた通り伝えたよ。」

と言いながら医者、先ほどの棒アイ

スのようなものが入った袋に入れて

渡す。

加部「どうも。鏡くんから陽性反応が出た……つまりあれをどこかで摂取したということになります。……目羅

さんの遺体から検出されたのと同じ薬物を。認可も降り

ていないどころか、麻取のデータベースにもない、あの

薬物」

医者「そりゃ不思議」

加部「にも関わらず、誰もこの件に触れようとしない。

こういう時の麻薬取締部が……」

医者「だからって勝手に捜査を？怒られるよー」

加部「今回は特例です。こんなケース……」

医者「特例は前例になり、前例は慣例になるものだよ」

加部「……存在しないはずの薬を摂取した教師と、その

学校の生徒。鏡くんが目羅さんの死に全くの無関係とは

考えにくい」

医者「でも、証拠は無いんでしょう？」

加部「全くありません。だからこそです。状況は彼を限

りなくクロだと言っている。にも関わらず、直接事件へ

の関与を示す手がかりを辿ろうとすると糸がぶつつり切

れてしまう……そんなの、逆に不自然だと思いませんか

か」

医者「“怪しいはずの鈴木鏡が事件に関わっている可能性”が全て排除されている……それは明らかに“誰かが意図的に排除した”と考えるのが自然……って？」

加部「ええ」

医者「そもそもどうして怪しいと？」

加部「確かなルートからの情報です。十分信頼に足り、

説得力もある。こうして貴女に接触しているのも、貴女

が篠崎さんの主治医だからという理由だけではありません

ん」

医者「ねえ、そのルートってさあ……」

加部「Need to knowの原則をお忘れですか？」

医者「……ま、良いよ。自由にやんなよ、手伝ってあげるからさ」

加部「……あの、貴女も全く無関係ではないですから

ね」

医者「へ？」

加部 「目羅さんは篠崎絵筆と親しかった。あなたはその

主治医」

医者 「……えっ、ちょっと知らないって。知りませー

ん。あんな薬、知りませーん」

加部 「……虫はつけてくれたんですか？」

医者、盗聴器をかざす。部長と鏡の

声が聞こえてくる。

加部 「関係があるなら、いずれボ口を出します」

医者 「すごい、これやっちゃダメなんじゃない？」

加部 「目羅さんのことご存じなんですよね」

医者 「え」

加部 「確かなルートからの情報で」

医者 「嘘」

加部 「……ええ、タダの勘です」

医者 「あは、それは凄い」

加部 「……で？」

医者 「……まあもういいか、うん、そうそう。目羅は知

つてるよ」

加部 「彼とはどういう……」

医者 「あいつ逃げたんだよ」

加部 「え……?」

医者 「あと何日で7月?」

加部 「6日です。24日ですから。」

医者 「時間がないなあ」

加部 「?」

医者 「……楽になりやがって、さ」

○廊下

鏡 「あの人、誰?」

部長 「さあ。俺が知るか」

鏡 「いきなり篠崎がどうだとか。そもそも俺、篠崎と

は三年間クラスが同じってだけで、別に親しいってわけ

じゃないし」

部長 「じゃあ何であんなに絵筆は話しかけてくるんだ」

鏡 「知らない」

部長 「接点は?」

【第2場 天文部】

鏡「だから、三年間同じクラスだってだけ……いや、あれ？」

部長「あるのか」

鏡「あー……何かー……あー……」

部長「ほらあったんじゃないか。そりやそうだ。あの絵

筆が何にもない相手とあんな話すわけがない」

鏡「篠崎ってそんなに話さないの？」

部長「ああ。だからお前が欲しいんだよ！天文部に来

い！篠崎絵筆の専門家として！」

鏡「専門家って……喋れるだけだし。宇宙とか興味ないしさ、天文部は……」

部長「じゃあなにか？お前は忙しいのか？ほかにやるこ

とでもあるのか？部活入ってたか？」

鏡「いや……別に」

部長「将来の為になにかやっているとか？」

鏡「そんなものないけど。大体もう6月だし。どうせ来

月で人類は滅亡するんだよ。ノストラダムスという偉い

やつがそう言ったってテレビでも学校でもそう話して

る。もう何やったって無駄……」

部長「お……!!」

鏡「なんだよ、嬉しそうに」

部長「お前、信じてるのか」

鏡「何を」

部長「ノストラダムスの大予言に決まってるだろ!!」

鏡「まあ……滅んでくれりゃ将来の事なんて考えずに済む

し。そしたらありがたい」

部長「おおおおお!!!!初めてだ!お前!ノスト

ラダムスの大予言を信じている人間が俺以外にもいると

は!嬉しい!嬉しいぞ……!!!!やはりお前を誘って良

かった!大正解だ!その通り!!巷の人間はどうせ嘘だ

と馬鹿にしている奴も多いがそう!1971年1月に人類

は滅亡する!!恐怖の大王が降臨するのだ!!俺の目的

はな、鏡。それを止める事なんだ」

鏡「なあ」

部長「なんだあ」

鏡「ノストラダムスはわかるよ。預言者だろ。恐怖の大
王ってのは何なの……人？なのか？」

部長「諸説あるがまあ、俺は宇宙人説を信じている。と
にかくそいつのせいで人類が滅亡の危機に晒されること
は間違いない。人類の敵だ。俺はな、鏡。それを止めよ
うと考えているんだ」

鏡「……どうやって？」

部長「平和的交渉さ。ロケットはあるメッセージが発信
できるようになっている。地球の周りに奴が現れれば――

――もちろんこれは地球的な意味での「現れれば」という

意味だが――そいつは十中八九そのメッセージを受け取
れるようになってる。俺が考えに考え抜いたメッセー
ジだよ。これを受け取れば恐怖の大王だってトコトツと
家に帰るさ」

鏡「内容は？」

部長「人類に言ってもわからんよ。お前、数学得意

か？」

鏡「いや全く」

部長「ならダメだ。というわけで、天文部に来てくれ！

お前がやらないと俺がやることになるが……それは難し

い」

鏡「何でだよ」

部長「忙しいんだ。それに俺は、うまく絵筆とコミュニ

ケーションが取れん」

鏡「どうやって部活やってきたんだ」

部長「なんだかんだな」

鏡「情けない部長だ、もう辞めろよ」

部長「辞めるか！内申に響く。それに、ついでにピアノ

も教えてやりやあ良いじゃねえか。さっきみたいによ。

初めてじゃないんだろ？」

鏡「いや、別にいつも教えてるわけじゃないって」

部長「そう聞いたが」

鏡「俺じゃないよ、それ。その話誰から？」

部長「らこっつてうちの部員だ。あ、同じクラス

か？」

鏡「らことは1年の時から同じだよ」

部長「ほう。ああ……合点が言ったぞ」

鏡「何が？」

部長「お前、天文部の風紀を乱してるぞ！責任取れ！責

任取れ！責任取って入部しろ！」

鏡「なんだよそれ……！っていうか放せよ！鬱陶し

い……！」

部長「じゃあ来るな？天文部」

鏡「わかったって……」

部長「じゃ、行くか！」

鏡「部室？」

部長「や、うちのロケットの発射場だ」

教室から出てエレベーターへ。

部長「掴まっとけ。動くぞ」

しばらくして鏡、少しふらつく。

部長「酔ったか」

鏡「少し……」

部長「慣れないときついな」

鏡「これ……どれぐらいで着くんだ」

部長「……」

鏡「あの……ちょっと早くないか、スピード」

部長「……」

鏡「これ、上に向かってるのか？それとも下？右？左……」

……？前、後ろ……？」

部長「……」

鏡「発射場って……どこにあるんだよ」

部長「ダムのだ」

鏡「……マジで？」

部長「（笑う）……着いたぞ」

重く甲高い機械音。軋むような音

に混ざって蒸気の噴出するような

音、エレベーターの到着音。ホイ

ッスルがいくつか同時に鳴り、ガ

シャンという重低音。

部長「じゃ。電話先輩よろしく」

鏡「電話……?」

と言って鏡にメモを渡し、背中を
押しながらはける。発射場に照明
付く。

鏡、辺りを色々見まわすが、誰も
いない。突然電話が鳴り始め、鏡
思わずそちらを見る。電話鳴り続
け、恐る恐る電話をとる。

鏡『あの……もしもし?』

電話先輩『地球で二番目に賢いのは?』

鏡『えー……あつ、(メモを見て)……イルカ?』

電話先輩『失われた宇宙飛行士は何人?』

鏡『5人と、あと1人』

電話先輩『……誰だ、お前。なんでここに来た?』

鏡『鈴原鏡……だけど。ここには……この部長が

来いって』

電話先輩『なぜ』

鏡『スタッフが足りないから、天文部入れって』

電話先輩『ほー。担当は？』

鏡『えっと……篠崎絵筆と話す役……？』

電話先輩『なんだそりゃ。仲良いのか？あいつに構

うなんて目羅くらいだろ』

鏡『目羅って……死んだ目羅？』

電話先輩『他に誰が。ずいぶん気にかけてたようだ

が……他に話す相手もいなかったみたいだし。妙な

やつだからな。知ってるかもわからないが。変だろ？

あいつ』

鏡『まあ……』

電話先輩『変だよ。たとえばあいつ……ここ九年間

この街から出たことがない』

鏡『え？』

電話先輩『あいつが家を出てちょっと小旅行にでも

行こうものなら交通規制がかかり、市役所からは健

康被害防止のための外出禁止が喚起され、周辺の小

中学校には不審者の目撃情報が寄せられ、警察官がうろつき始めて篠崎を見るなり家に帰れと申し付ける』

鏡『なんで……』

電話先輩『さあ。でもとにかくあいつの遠出は極端に制限されている。というかおそらく……この町から出られないんだ』

鏡『いや、そうじゃなくて。何で電話先輩……はそんなこと知ってるんです』

電話先輩『趣味……だな。俺は自分の部屋から出ない。で、ここで色々な情報に接続したり、遮断した

りしてる……まあそんな事別にいいんだ。また何か

あったらかけてくれ。暇だからなあ。番号は090

・3123・0251だ』

鏡『3123?』

電話先輩『0251。じゃ、妹によろしく』

鏡『妹?』

電話が切れる。らこ、まどか登

場。

まどか「あれ……誰？」

らこ「なんているのよ。今更入部？よりによって天

文部に……」

まどか「知り合い？」

らこ「一応三年間同じクラス。篠崎もそうだけど…

…で、何？」

鏡「らこって天文部だったんだ」

まどか「あら、呼び捨て」

らこ「だからなに」

部長、発射場に入ってくる。

部長「電話先輩、なんだって？」

らこ「ちょっと部長、なんで鏡がいるの」

部長「あら、呼び捨て」

らこ「ってか、電話先輩って……」

まどか「お兄さんだね。らこちゃんの」

鏡「あ、妹」

らこ「一家の恥よ……あんなの」

鏡「よろしくって言われたよ」

らこ「もう二度と話さなくて良いから」

部長「何か言ってたか？他に」

鏡「え！……あ、死んだ目羅先生ってさ、篠崎と仲

良かったの？」

まどか「ここにもたまに来てたね」

らこ「また目羅の話……ここ最近ずっとそれ。今日

も学校来るとき新聞の人がまたいた」

部長「まあ、まだ真相がわからんのだから仕方ない

な。しかしもっと取り扱うべきニュースがあるだろ

う！人類滅亡、世界の終わりが迫っているんだぞ！

連日特集を組んでも良いくらいだ！」

らこ「それ、うちの親までちょっと信じてるんだけ

ど。「まあありえないと思うけど……」とか言っ

て。そりゃありえないでしょ」

部長「お前まだ信じていないのか？どうしてうちに

いるのかわからんな！」

鏡「信じてないの？」

らこ「あんたまで信じてんの？……その話が出ると

“ふいんき”暗くなるし、ほんと嫌だ」

鏡「“ふんいき”ね」

らこ「揚げ足取らないでよ！」

まどか「揚げ足……ねえ、揚げ足って何？」

鏡「揚げ……フライドチキンの事じゃない？」

まどか「揚げ足を始めて取られた人は、フライドチ

キンを食べてたんだね」

らこ「フライドチキンねえ……クリスマスの時しか

食べないな」

まどか「ね。ねえ、なんでクリスマスって「X（エ

ックス）」マスって書くの？」「X」って何？」

らこ「キリスト、クリスト、クロスト、クロス、つ

まり×（クロス）。X（エックス）はキリストの×

（バツ）。」

鏡「キリストの罰？」

らこ「罰じゃなくて×（バツ）」

「ここ、手をクロスさせる。」

部長「Xってのは、変数Xだ」

まどか「キリストって、どんな人かわかんないな。」

超有名だけど」

鏡「変数Xってもわかんないな。俺、数学苦手だ

し」

「ここ「キリストは神様の子供で、なんでもありの

人。5つのパンを5000個に増やしたり、水をワ

インに変えたりする人」

部長「変数Xはアルファベットの小文字で、なんで

もありの記号だ。5を代入したって良いし、500

0にしても良い。XではなくYを用いることもある

が」

まどか「つまり、Xがいれば5が5000になった

り、突然Yが現れたりするってわけだよね。Xって

不思議だね。それがクリスマスなんだね」

部長「代数X。X, mathematics。大抵の

不思議な事は数学で説明できる」

らこ「部長って、オカルト大好きなんじゃない

の？」

部長「もちろん好きだ。だが俺は別にファンタジー

やメルヘンでオカルトをやってるんじゃない、科

学でオカルトを考えているんだ。ケネス・アーノル

ド事件もクーパー家も、心霊写真もスターファイタ

ーXも、ノストラダムスの大予言も！この世の不思議

は全て数学で説明できるはずだ」

らこ「『恐怖の大王、人類滅亡、世界の終わり』も

数学で説明できるの？」

部長「できる。そう言っただろう？俺は膨大な統計と試

算の果てに、予言は真実！恐怖の大王は降臨し人類

は滅亡の危機に晒され、世界の終わりは実際に来た

り得るという結論に至ったのだから」

らこ「じゃ、説明してよ」

部長「そんな時間はない。俺たちはさっさとロケット

トを完成させ、恐怖の大王に人類滅亡から手を引

け！！！！と告げなければならない」

鏡「どうやって？日本語じゃないよな」

部長「こういう時は幾何学模様を使うのが宇宙の常

識だ。俺はロケットにその為の図式をいれ、飛ばす

つもりでいる」

鏡「そのロケットって……」

部長「ふ……よくぞ聞いた！！茂原第三高校天文部

誕生以来、三十年間続いた先人たちの苦節の到達点

にして最高峰！安全面の欠陥から凍結されたダッシ

ャー、ダンサー、計画段階で中止したブランサー、

ヴィクセン、コメット、試験飛行で発射場を爆破し

たキューピッド、ドンダー。設計ミスがたたって航

行距離が足りなかったブリッツェン……そして全長

3・5m、重量385t、これぞ一部再使用型有人

宇宙船。ルドルフ四号だ！」

部長、ロケットをみせる。

鏡「これ……ほんとに飛ぶのか？」

部長「飛ぶ！！……そう信じるのが、発射の第

一步だ」

らこ「飛ぶのかねえ……？」

部長「飛ぶに決まってるだろう！」

らこ「なんか信用できない」

鏡「すごいな……」

まどかが鏡の写真を撮る。

鏡「！」

まどか「超驚いた顔、してたから」

鏡「でも……すごいよ。ほんとに高校生が造ったも

のとは思えない」

部長「な、手伝ってくれよ。発射予定日まであと約

一週間……少々人手が足りない」

鏡「俺……別に何もできないけど」

部長「お前にはパイロット……要は絵筆との通信を

行ってもらいたい。ロケットの発射と帰還の時、空

にいる絵筆と地上で色々連絡を取る役目を頼みたいんだ。なるべく心を開いてる相手の方が良いんだよ。

よ。宇宙の仕事は信頼関係が資本だからな」

鏡「篠崎……パイロットなんだ。意外」

らこ「あいつがやりたいって言ったの」

鏡「マジで？」

部長「あんなに自己主張をしたのはそれが最初で最

後だった。天文部に来たとき、初っ端から——」

まどか「入部届に『ロケットに乗りたい』って」

部長「正直な話、俺たちはただただロケットを組み

立てただけで、完成した時に誰が乗るか、なんて話

は今まで一度もしたことがなかった。有人で設計さ

れてるのは代々そうやってきたからってだけであっ

て……メッセージさえ送れば良いわけだからな。

遠隔でやっても構わんし、パイロットが操縦しても

構わない。だから絵筆がパイロットとして乗りたい

って言うなら拒否する理由はどこにも無かった」

鏡「へえ……」

部長「そうだから、あれ買ってきてくれたか？」

らこ「まだ。今から行く」

部長「!?!まだ買ってないのか!怠慢だぞ……あと

一週間しかないというのに」

らこ「こんな直前に買い出しが必要な事がそもそも

おかしいでしょ!」

部長、声にならない声を出す。

らこ「はあ……じゃあまあ、行ってくる」

まどか「気を付けてね」

らこ「ん」

らこ、はける。

部長「そんじゃあ……む。パイロットがいないな」

まどか「絵筆ちゃん、教室にいたよ」

部長「篠崎絵筆担当!……そう、お前だ鏡、連れて

きてくれ」

鏡「まあ……良いけど」

部長「行けえ!!!」

【第四場 篠崎絵筆】

鏡、はける。まどかと部長もその後出る。

鏡「知らない……あ、さっき篠崎の主治医って人が来てたよ」

絵筆「！なにしに」

鏡「さあ」

絵筆「そっか」

教室で絵筆がピアノを弾いている。

鏡「うん。あ……ごめんこれ、別に答えたくなかったら良いんだけど」

絵筆「なに？」

絵筆「あ……」

鏡「また弾いてるんだ。何の曲なの？それ」

鏡「篠崎って……病気なの？」

絵筆「……知らない？」

絵筆「病気……」

鏡「違うの？」

絵筆「でも、薬は飲んでる」

絵筆、薬の入った注射器を二つ取

り出して見せる。

絵筆「なんの薬か、知りたい？」

鏡「いや、別に……」

絵筆「これは、見えるようになる薬」

鏡「え、何が？」

絵筆「眼が」

鏡「眼が……」

絵筆「夢が。……こっちの薬は視力回復……多少は

視界がはっきりする。こっちは睡眠導入剤……夢が

良く見れる……欲しい？」

鏡「えっ」

絵筆「薬、鏡くんも欲しい？」

鏡「……なんで俺にくれようとするの？」

絵筆「え」

絵筆、少し気まずそうになる。

絵筆「……………欲しそうに見えた……………から、だけど。」

欲しくなかった？……………けど、どっちが良い？眼が良
く見えるのと、夢が良く見れるの」

鏡「俺は——」

らこ、教室に。

らこ「鏡」

鏡「あれ、買い出し行ったんじゃない……………」

らこ「今から。それより部長が呼んでた。発射場行

ったら？」

鏡「部長に言われてこっち来たんだけど……………そうい
えば、篠崎のことも呼んでた」

絵筆「……………わかった」

鏡、去りかける。

らこ「あ、待って」

鏡「？」

らこ「……………目羅の件……………どう思う？」

鏡「ああ……。俺も授業受けたことあるし、死んだ

って聞いてびっくりしたけど。でもあんまり実感は

ない、正直」

らこ「そう。そうだよな。うん。じゃあ……。行った

ら

鏡「うん」

鏡、教室からはける。

らこ「篠崎」

絵筆、無視。

らこ「篠崎、聞いてんの」

絵筆「……なに？」

らこ「篠崎ってさ……。目羅とどんな関係だったの」

絵筆「別に何も……」

らこ「無いわけないでしょ。だって、無けりゃー

」

絵筆「帰る」

らこ「……発射場、行かないの？」

絵筆「「今日は病院に来なさい」って。先生が」

らこ「篠崎の作業分、また私がやらないといけないんだけど」

絵筆「部長も『パイロットの体調が最優先だ！』って」

らこ「だからって……多すぎるでしょ。病院なら元々わかってるんだから、早めに終わらせるとか、色々やりようがあるんじゃないかって思うだけ」

絵筆「いつもわかるわけじゃない。「今から来てくれ、時間は動かせない」って先生が言う事も」

らこ「なんだかよく喋るね。私たちにはいつも一言二言しか喋らないのに……っていうか、急ぎのくせにピアノなんか弾く余裕はあるんだ」

絵筆、少し動揺する。

らこ「いや、答えなくてもいい。私わかってんだから、篠崎がなんでピアノなんか弾いてるか……」

絵筆「『ピアノを弾くのは心に良い』って、前に本でも——」

らこ「だってその曲あれでしょ、あいつが——」

絵筆「さっき、鏡くんも「良い曲だね」って」

らこ「ねえ……いい加減それ止めたら。先生が言っ

た、部長が言った、本で読んだって……さっきから

ずっと……なんで自分の言葉で話せないの？」

絵筆、何も言わない。

らこ「そういうとすぐ黙る。結局のところ、あんた

には自分が無いんですよ。身体なんかより、そっち

の方がよほど重篤じゃない。医者がないと身体も

まともじゃない、部長や鏡がないと自分の意志も

外に出せない、一人じゃ何にも出来ないで、よく平

気でいられる……」

絵筆「……一人で」

らこ「なに」

絵筆「一人で生きられるなんて、偉いことでもなん

でもないから」

らこ「……なんでよ」

絵筆「そんなのは……支えてくれる人がいない自分

への言い訳でしかないから」

らこ「は……」

らこ、ひるむ。

絵筆「誰も頼れなくて、誰も信用できないから、仕方なく一人で生きてるだけだから。偉くもなんとも

絵筆「言ってもらいたいんでしょ」

ない、幸せになれない。かわいそう。通院しないと

らこ「篠崎——」

カメラのシャッター音。教室の入

ダメでかわいそう、皆と遊べなくてかわいそう、皆

リ口にまどか。

私にそういうけど、本当にそう言われるべきなの

まどか「驚かせた？ごめん。二人がそんなに喋って

は、貴女みたいな人」

るなんて、珍しいなって」

らこ「なんの根拠があってそんなこと、私は——」

らこ「まどか、何しに……」

絵筆「かわいそう」

まどか「らこちゃん、早く買い出し行かないとでし

よ」

らこ「あ……」

まどか「部長にまた説教されるよ」

まどかに電話がかかってくる。

まどか「あ、部長。ああ（らこを見ながら）……ま

だいますよ。え、ああ……じゃあ」

まどか、らこに電話を渡す。

部長『おい！！まだお前そんなとこいんのか！！』

らこ『……ごめん』

部長『え……あ、おう……あ、いやそんな、急がな

いで良いぞ。あ、明日でも良いぞ』

らこ『そうっ？』

部長『おう……なんなら今日は戻ってきたらどう

だ』

らこ『わかった』

らこ、電話を切り、まどかに渡

す。

まどか「部長、なんて？」

らこ「発射場戻ってこいって」

まどか「そう。じゃ、三人で戻ろうか」

らこ「……篠崎は病院なんじゃないの」

医者、突然教室に入ってくる。

医者「絵筆ちゃんー今日は病院お休みで良い

よ！ー！！」

らこ「……誰ですか？」

医者「絵筆ちゃんの主治医……てか、君も誰？」

らこ「あ……すいません。村上です。村上櫻子。篠

崎さんとは同じ天文部で」

医者「えー！？絵筆ちゃんの友達ー！？へー！！」

らこ「友達っていうか……」

まどか「友達です。私も」

医者「あく良いね、青春だね。まあ、絵筆ちゃん

とは仲良くしてあげてよ、ほんとにね。高校生活あ

とちよっとなんだからさ？」

医者、はけて前へ。聞き耳を立て

ている。あとから加部がやってき

て傍に。

らこ「まだ六月なんだけど」

まどか「三年生の六月だからねえ。夏が来たらそつ

からは早いよ？」

らこ「部長は夏が来ないかもとか言ってるけど……

「恐怖の大王の降臨を阻止できなければ夏は来な

い！夏への扉を開けるのは我々だ！」って」

まどか「じゃ、ロケットの準備急がないと」

らこ「まどか……部長の言うこと信じてるの？」

まどか「うーん。どっちでも同じじゃない？でも信

じた方が楽しいよね。サンタクローズとかと同じ……

……というわけで、行こっか」

まどかだけ先にはける。

らこ「あいつに、薬打たせようとしたでしょ」

絵筆「聞いてたの」

らこ「あんたはそれで良いと思ってるの？」

絵筆「良い」

らこ「私はそうは思わない」

絵筆「……言うの」

らこ「かもね」

らこ、絵筆、発射場に戻る。医

者、加部が教室へ入ってくる。そ

の後、鏡が入ってくる。

医者「もう、なんでこんなところにいの？絵筆ちゃ

んは？」

鏡「教室でピアノ弾いてますよ。……あの、先

生？」

医者「なに？絵筆ちゃんのこと？何か聞きたいの？

何でも教えてあげるよ！でも言えないこともある

よ？例えばどこに住んでるとか、どこで生まれたと

か、いつから篠崎絵筆なのかとかそれが何番目の名

前かとかそれは名前じゃなくて——」

○教室

鏡「あっ……どうも」

加部「その辺で。……なんですか？」

鏡「篠崎って、目羅先生と仲良かったんですか」

一瞬の沈黙。

医者「そうじゃない？」

加部「気になりますか？」

鏡「まあ」

医者「君とは仲良かったんですよ」

鏡「いや……」

医者「ピアノ、教えてあげたんですよ」

鏡「え」

医者「私も好きだよ？あの曲」

鏡「あれ、何の曲なんですか？」

医者「……最近、忘れっぽい？」

鏡「え……あ、はい」

医者「ふーん、いつから？」

鏡「それもなんか……どうだっけ。二週間くらい前

……とか？」

医者「……お大事に」

加部「十日前のことは覚えてますか？」

鏡、はける。絵筆とらこが来る。

鏡「十日前……何曜日ですか？」

医者「あ、時間か。偉いね」

加部「木曜日ですね」

医者、絵筆に注射とか打ってる。

鏡「……わかんない、ですね……」

らこ、加部に向かって。

加部「そうですね」

らこ「警察の人ですか？」

医者「行ったら？呼ばれてるんでしょ？」

加部「いえ、麻薬取締官です」

鏡「なんで知ってるんですか？」

らこ「目羅先生の件……ですよ。そういう死因な

医者「へへ」

んですか」

鏡「……まあ、なんでも良いですけど」

加部「そういう？」

らこ「過剰摂取、とか」

加部「お話できません」

らこ「じゃあ、篠崎の薬のことですか」

医者「これ、普通の（薬）だよ？」

加部「たとえそうでなかったとしても、お話できる

ことはありません」

らこ「……そうですか」

加部「気になりますか？」

らこ「いえ」

医者「絵筆ちゃんのピアノって聴いたことある？」

らこ「……ないですけど」

医者「聴かせてあげたら？」

絵筆「いい」

らこ「……らしいんで」

医者「そ」

らこ「聞きたいんですけど……夢を見る薬、って、

ありますか？」

加部「……副作用として悪夢を見やすくなる、といったものならありますね」

医者「夢見る薬？なんか楽しそうだね。現実逃避できるのかな？良いね」

らこ「じゃあ——」

医者「あ、でも若いんだから無理に薬とか飲んでちやダメだよ？最近増えてんだから、患者が来たらすぐ薬出す医者、あれダメだよな？二人はそんなんなつちやダメだよ？最悪加部ちゃんにも迷惑かけちゃ

うかもだし気を付けてドリキャストとかダンレボやって元気出してもうベタナミンとか捨ててね！……は

あ。行こっか」

加部「は……あ、はい」

医者と加部、はける。

絵筆「現実逃避……」

らこ「……ねえ、このままずっとあいつをこのままにしとくわけ？どうやって？いつまで？」

絵筆「できる」

らこ「出来ないわよ。私、言う。言いにいく」

絵筆「今？」

らこ「そう」

らこ、早足ではけていく。絵筆は

逆からはける。発射場で鏡とまど

かと部長がいて、適当に話してい

る。そのうち鏡、発射場の隅に置

いてある望遠鏡に近づいていく。

まどか「誰のっていうか……天文部の備品かな？使

う？」

部長「自由に触ってもらって構わんぞ！もう天文部

の一員なわけだからな！」

鏡、天体望遠鏡をのぞき込む。

まどか「この時間だと空が黄色く見えるかもね」

部長「どうだ？鏡？」

鏡、何も言わない。

鏡「これ……誰の？」

部長「鏡？」

鏡「赤い……」

まどか「あるよー」

部長「あ？」

まどか、白い布を投げて渡す。部

らこ、発射場にやや速足で入って

長、布でレンズを拭くと赤い汚

くる。

れ。

鏡「らこ……」

部長「これ……血か？」

部長、天体望遠鏡のレンズをのぞ

鏡、動揺している。

き込む。

らこ「落ち着いて……」

部長「なんか汚れてんな……まどか、その辺に拭く

絵筆がらの後ろからやってく

もんじゃないか」

る。鏡に向かう。

絵筆「じっとしてて」

らこ「篠崎」

絵筆「我慢して」

絵筆、鏡に注射器を打つ。

鏡、その場にくずおれる。

部長「鏡！？……絵筆、今……」

医者「用量には注意しようっていつも言ってるじゃ

ん。忘れちゃった？」

医者と加部、出てくる。

加部「その薬……」

医者、鏡に近づく。様子を確認

し。

医者「またか。寝た子を起こすのは、そんな嫌？」

加部「篠崎さん……その薬、渡してください」

絵筆、無視。

加部「篠崎さん」

部長「らこ……大丈夫か？」

らこ「私……」

加部、絵筆から注射器の入った袋

を奪う。

加部「篠崎さん……鏡くんは何を打ったんです？……

…それは目羅さんにも、打ちましたか」

篠崎「してない」

加部「……確かめましょうか」

注射器に検査薬を垂らす。

加部「……目羅さんの亡くなった現場にいました

か？それと、あなただけではなく——」

らこ「もういい」

部長「らこ？」

らこ「いずれ話さないといけなかったから」

絵筆「話さなくて良い」

らこ「あんたは黙ってて……十日前、六月十四日」

【第五場 十日前、六月十四日】

らここと鏡がダム側の丘を歩い

ている。鏡は天体望遠鏡を背負っ

ている。らこは懐中電灯を持って

いる。

鏡「なんでこんな夜中に……」

らこ「しょうがないでしょ！部長が月の記録つけて

こいって言うんだから。そんなの持てないし」

鏡「普通に天文部の人誘ってよ……てか、こういう

普通の天文部みたいなことしないんじゃないかなかった

の？」

らこ「観測。発射に必要なんだって」

鏡「これ、結構重いんだけど……」

らこ「誰か来るー！」

らこと鏡、隠れる。

鏡「……なんで隠れたの？」

らこ「なんとなく……」

鏡とらこ、現れたのが誰か気づ

く。

らこ「目羅じゃん、数学の。と……」

鏡「絵筆？」

らこ「ほんとだ。……あんた仲良いよね、最近さ。

ピアノとか教えてんでしょ」

鏡「好きなんだよね」

らこ「え……」

鏡「好きでさ」

絵筆と目羅、現れる。らここと

鏡、更に息をひそめる。

絵筆「私を逃がすの？皆みたいに……無駄なのに」

目羅「一番わかってるよ。……（笑って）東京でも

行くか？一緒に」

絵筆「これまで、何人埋めたの？」

目羅「さあ」

絵筆「私も？」

目羅「……悪い」

刃物を取り出す目羅。絵筆、諦め

たように俯く。らここと鏡が声を上

げ、目羅と絵筆がそちらに気づ

く。

鏡「何……してるんですか？」

目羅「村上と……鈴原か。どうしたお前ら」

らこ「部長に言われて、月を……」

目羅「月？（望遠鏡に目をやる）たまには天文部ら

しいことするんだな」

鏡「あの、何を……」

目羅「これか。……説明が少し難しい」

絵筆「鏡くん、帰って」

目羅「見ても良いが……見てて楽しいもんじゃないな

い」

目羅、刃物を構える。

絵筆「銃じゃないんだね」

目羅「卑怯な感じするだろ」

鏡、目羅に一步近寄る。目羅は一

瞥する。らこが引き留める。鏡、

望遠鏡を強く握る。

鏡「やめてください……」

目羅「殴って止めるか？そうやって使うもんじゃな

いだろ？」

鏡「絵筆と仲良い、じゃなかったんですか……？」

目羅「そりやお前だろ？ピアノ教えてくれてありが

とな」

鏡「……どういう関係なんですか」

目羅「保護者みたいなもんだな、あー……学校で

の」

らこ「保護者が、なんでそんなもん向けてんの」

目羅「うちはうち、余所は余所……みたいな感じか

な」

らこ「意味わかんない。……マジで言ってる？」

目羅、不意に絵筆に切りつける。

前髪が落ちる。

鏡「絵筆！」

目羅「決まってることだ。こいつも承知してる」

絵筆「……目羅」

目羅「どうした」

鏡、目羅と絵筆の間に割り込む。

絵筆「ピアノ、まだ上手くない」

目羅は後ろに下がる。

目羅「……知ってるよ。昨日も聴いた」

鏡「ほんとに、何してるんですか……？」

絵筆「上手くなるまで、待てない」

目羅「……お前、助けたいのか？」

目羅「……ダメだな。そんなに甘やかせない。じき

鏡「そりゃ、だって……」

七月になる」

目羅「（しばらく鏡を見て）本気か？」

目羅、絵筆に近づく。

鏡「何が……？」

鏡「ちょっと！」

しばらく沈黙。

目羅「……なら、それでもいいか」

目羅、鏡に向かって本気で切り掛

かる。鏡、怯えて振り払うように

思いつきり望遠鏡を振る。目羅は

避けず、殴打を受けて倒れる。

鏡「え……あ、あ……あの」

目羅「（独り言のように）無責任かなあ……」

鏡「え……？」

目羅「悪い……」

目羅、目をつぶって何も言わなく

なる。

鏡「目羅先生……？」

らこ「何なの……篠崎、なに？これ、あんたと――

――

絵筆、鏡に近づいて後ろから注射

器を刺す。鏡、朦朧とし出す。

らこ「何やってるのー？」

絵筆「明日にはわかる。……今日は帰って。……今

日は帰って。何もなかった……何もなかったことに

なるから。(らこに向かって)……鏡くんを、お願

い」

絵筆、去っていく。

らこ「ねえ、ちゃんと説明してよ……」

絵筆に呼びかけるも無視されるら

こ。諦めて鏡に肩を貸し、その場

を去る。

目羅、苦しそうに起き上がり、少

し考えて注射器を拾って自分に打

つ。散らばった薬を集めてしま

い、立ちあがって、はけていく。

時間、現在に戻る。

らこ「こいつは、自分が何をしたか忘れた……最初

はそれでも良いと思った」

絵筆「ダメなの」

らこ「ダメに決まってる……」

部長「そもそもなんだが……目羅はなぜ、絵筆を殺

そうとしたんだ？」

沈黙。それを破って、医者が話し

出す。

医者「教えてあげよつか。それとも、自分で言う？」

鏡くんが寝てる間にさ。……ヒント、絵筆ちゃんは

“七月になる前に”死ななければいけなかった」

しばらく間。

部長「……ありえん！！」

らこ「何が」

部長「いや、しかし……」

加部「死ななければ……？あの、なにが——」

医者「絵筆ちゃん、どうする？」

絵筆「私……」

医者、少し笑う

部長「電話先輩……！」

電話先輩『……！それが過保護の理由か。目羅にあ

なたに……この街のいくつの施設がそいつ一人のた

めに建てたられたものなんだ？いくつの電波がそい

つ一人の監視網に組み込まれてる。いくら人間が

そのことを知ってる』

医者「それを知るべき人の数だけ？」

電話先輩『気に入らん』

医者「君は知らなくてもいい人だよね」

電話先輩『知るか、そんなの』

医者「危うい性格〜」

加部「知っていたんですか？」

医者「何が？」

加部「目羅さんが篠崎さんを殺そうとしていた……

なんて。知っていたんでしょう？なにか情報を持つ

ているなら、なぜ私に共有してくれなかったんです

か」

医者「Need to knowの原則。情報は知

る必要ある者にのみ与え、そうでない者に与えな

い。君だって私に言ってたでしょ？加部ちゃんは、

ここがどんな街かもしれないんだから」

まどか「この街が……」

医者「教師が突然生徒を殺そうとする。異常だよ

ね。変な街だよね」

加部「何故通報しなかったんですか」

絵筆「らこは鏡くんが大事だから。……だから黙っ

ててくれたから」

医者「部長はどう思う？」

部長、それには答えず、図面を持

ってきて、絵筆に見せる。

部長「絵筆、これ読めるか？」

絵筆、何か返す。周りには聞きと

れないが、なにか数式のようなも

のを呟いているように聞こえる。

部長「そうか……」

加部「今のは……？」

まどか「図式です。ロケットから、恐怖の大王宛に

発信する予定の……データを起こす前の奴」

部長、苦しそうに叫ぶ。

部長「……絵筆は!!」

らこ「なに」

まどか「部長が大きく出ようとして苦しんでる…

…」

医者「大胆な仮説を披露するには勇気が必要だもん

ね」

部長「絵筆が!!!」

まどか「頑張ってる……」

部長「絵筆が恐怖の大王だったんだ!!!」

らこ「はあ？ちょっとこんな時まで……」

医者「そうだよ」

らこ「そうなの!？」

まどか「そうなんだ……」

らこ「納得早くない……?」

加部「あの、ちょっと……」

絵筆「私……」

全員が絵筆の方を見る。

医者「そ。絵筆ちゃんが予言された『恐怖の大

王』。私たちは何とかしようと思んな事を……本当

に色々したけどどうにもならなかった。絵筆ちゃん

は普通になれなかった。もう六月……七月になった

ら取り返しがつかない」

絵筆、うつむきがちで弱い声

で。

絵筆「……鏡くんには、言わないで」

絵筆、強い口調で。

絵筆「鏡くんには言わないで」

部長「既にいたわけか、地球に……」

らこ「そんな突拍子もない……根拠出してよ。……

そんな話信用しろって？」

加部「私も……そんな非現実的な。信じられませ

ん」

部長「だから……パイロットに」

絵筆「私、絶対乗る。乗って、地球からいなくな

る。……墜落しても良い。どっちでも良い」

らこ「世界の終わりなんて来るわけない、あんな口
ケット、ちゃんと飛ぶかもわからない……あんだ死
んじゃうかもしれないだよ」

絵筆「だから、乗るの。そうしないと鏡くんが死ん
じゃうから」

医者「そ。絵筆ちゃんはもう死なないとダメ。それ
に、仮にロケットが打ち上がって、地球からずっと
遠くに行けたとしても……絵筆ちゃんがそのまま地
球から飛び去る保証なんてどこにも無い。理不尽を

強いる私たちに復讐する為に帰ってくるかも。そん
なりスクは背負えないよね」

加部「……仮にそんな話が事実だったとして……ど
うすれば良いと言うんです」

医者「加部ちゃん、麻薬取締官でしょ。銃持ってる
でしょ。ここで処分しちゃったらず」

加部「えっ……」

医者「人類全体の命と、絵筆ちゃん一人の命じゃ
ん」

加部「意味が——」

医者「じゃあ、こうしよっか。あと五日待ってあげるよ。五日もあれば決められるでしょ」

まどか「決めるって何を………?」

医者「絵筆ちゃんを私に返すか、返さないか。ま

あ、後者なら七月には皆死んじゃうわけだけど……

絵筆ちゃんも、部活やって、友達できて、楽しかつ

たでしょ。もう現実に帰ってきなよ」

絵筆「……」

医者「もうそれしかないんだから」

絵筆、何か言いかけるが突然胸を

押さえて苦しそうにうづくまる。

皆かけよる。医者、そんな周りを

見て舌打ちをして絵筆に駆け寄

り、カバンから注射を取り出して

打つ。

医者「どうしてカバン、持っていないの」

絵筆「(せき込みながら)ごめ……さい……教室に

……」

医者「気を付けて」

絵筆「……うん」

医者、立ちあがる。

医者「じゃ、決めといてね。私帰る」

らこ「待ってよ」

医者、振り向く。

らこ「篠崎がその、恐怖の大王……だったとして、

どうやって人類滅亡なんかさせられるっての。どう

やって世界を終わらせるの？そいつは一人じゃ何に

も出来ないようなやつなのに」

医者「説明しても納得できないと思うよ」

らこ「じゃあ、篠崎はどうしてそうなったの」

医者「こういうのって理由はないもんだよ。そうな

っちゃったとしか言いようがないよね」

らこ「そんな——」

医者「理不尽な人って、いるよね」

医者が去っていく。加部、逡巡し

てそれを追いかける。

休憩 15分 幕間劇 蓋をあけて

舞台上に京子が立って、電話をして

いる。舞台中央に、ポリバケツの

蓋が置かれている。

京子「そう……そう。で、そいつスゴイ変な奴だっ

たの」

エリカ「こないだのチビより？」

京子「あのチビより」

エリカ「あいつほんとおかしかったよね、気持ち悪

いですよね、自分チビですしねってずっと……」

京子「ああいうのは気持ち悪がって欲しいんです

よ。ああいうのって、褒められたり慰められたりす

るには金払う癖に、けなされんのはタダだと思っ

んの」

エリカ「ああやればバカにしてくれると思ってんのかな」

京子「バカじゃね」

エリカ「バカ」

京子「けなすのだって興味なきやしないし。興味もってほしけりやもっとお金ちようだいてね」

エリカ「ね。で、もっと変な奴って？」

京子「そう。そいつ、電話するだけで、会わないって言うの」

エリカ「テレクラ行けば良いのに」

京子「ね。でも話がおもしろくて……」

エリカ「どんな話？」

京子「そいつが住んでる街の話」

男、出てくる。顔は見えない。電

話先輩役の演者。

男「そう、で……俺の住んでる街は月がデカいんだ

よ」

京子「どのくらいですか？」

男「うーん、とにかくデカイ。だから、夜になると

雲に月の光がバーツてあたって、雲が全部黄色くな

るわけ」

京子「嘘」

男「嘘じゃないって。だから夜でも結構明るい」

京子「それ、眩しくないですか？」

男「まあね。でも便利なんだよ。夜になると、昼間

落としたものを探しに、皆家から出てくんの。で、

外をウロウロしてるの」

京子「絶対嘘」

男「半分ね」

京子「半分？」

男「夜になると人が街をウロウロしてるのはほん

と。でも、落とし物を探してるのは嘘。人を探して

んの」

京子「……誰を？」

男「それは言えんなあ」

京子「なに、それ」

男「ま。いいか。あのね、この街にはでかいダムがあるんだよ。で、その底にオットセイが飼育されているの」

京子「は？オットセイ」

男「そう。で、オットセイはたまにそこから逃げ出すとすの。海とか、川とか、街とか。ダムから出て、自由に暮らしたいわけ」

京子「可哀想」

男「だろ。だからたまに、飼育員が、逃がそうとするんだ。夜中に、オットセイを連れて」

京子「それ、しょっちゅう？」

男「そう。だから、それを邪魔するために、夜中に人がウロウロしてんの。で、もしそういう飼育員を見つけたら、捕まえちゃうんだよ。オットセイだけ、ダムの底に戻してね」

京子「飼育員はどうなるの？」

男「穴に住んでもらう」

京子「え？」

男「モグラになるんだ」

京子「何言ってるの？」

男「これもまた変な話……ダムの傍に、キャンプ場

があつてね。で、その管理人の息子が……ちよっ

と変わってるの。そいつ、「俺はいつか人を殺しち

やうかも」と思ってたずつとビビってたよ」

京子「何それ……」

男「そう思うだろ。でもそいつ本気なんだよ。で、

もし殺しちゃったらどうしようどうしようと思っ

て、キャンプ場に深い……15mくらいの穴を掘っ

たんだ。いくつもな」

京子「それで……？」

男「そいつは掘るだけ掘って、今度は「自分が埋め

る前に勝手に誰かが埋めてたらどうしよう」と不安

になって、二度と穴に近づけなくなったんだ」

京子「なんなの、そいつ」

男「変な奴なんだよ。それでキャンプ場には、ただ深い穴がたくさんできた。で、それを再利用するのことにしたんだ」

京子「じゃあ、オットセイを逃がそうとした飼育員は、そこに埋められてるってこと？」

男「いや、埋められてんじゃなくて住んでもらうんだって」

京子「いや——」
男「気になるだろ」

京子「え」
男「飼育員が、穴にいるのか」
男、はける。

京子「って」
エリカ「何をいつ……キモ」

京子「そう……でも、気になるでしょ」
エリカ「何が……」

京子「飼育員が、穴にいるのか」

エリカ「あのさあ……そんな間に受けて、あんた

ちよっと変だよ。月の大きい街？月はどこから見て

も同じでしょ。夜にオットセイを逃がそうとする飼

育員……意味わかんないから。その上深い穴だらけ

のキャンプ場？客が落ちまくって大騒ぎになるよ」

京子「普段は隠してあるみたい」

エリカ「ん？」

京子「ポリバケツの……蓋で。ほんとだったんだ」

エリカ「ほんとだった……？」

京子「あの人の話してた通り……」

エリカ「え？そこにいるの？なに？何してんの？ち

よっと、大丈夫？」

京子「確かめてみるね」

エリカ「いや……え？」

京子「蓋をあけて、なかに、何がいるのか」

エリカ「やめようよ……気持ち悪いって」

京子、答えない。

エリカ「ねえ！やめなって！変だって、ねえ！」

京子「あ」

京子、しゃがみこんでポリバケツの蓋をゆっくりと開けて中を覗きこむ。しばらく表情は変わらないが、少しして、穴の中に手を伸ばす。伸ばしていくが、突然ビタッと止まって穴を凝視する。

暗転

第二幕

【第六場 ホットケーキⅡパンケーキ】

幕間劇 終

エリカ「ねえ……どうしたの？何してるの？何か見たの？何か……何がいたの？ねえ！ちよつと！！」

まどか、部長、作業をしながら話している。鏡は『夏への扉』を読んでいる。

鏡「今日、らこいないの？」

部長「買い出し行ってもらってるからな。そろそろ

来るだろう……ほら今」

らこ、教室に入ってくる。

らこ「どうも」

まどか「お疲れ」

鏡「遅かったね。ここ来た時読み始めた本、もう終

わっちゃったよ」

部長「さっき本を開いたと思ったら、いつの間にか

閉じてる。読書なんて、そういうもんよ」

鏡「そういうもんかあ」

らこ「鏡あんた、授業中も関係ない本ばっか読んで

るでしょ。ちゃんと受けないと赤字で卒業する羽目

になるよ」

まどか「赤字で卒業するとね、証書の字も赤く書か

れるんだよ」

鏡「え、ほんと？」

らこ「ほんと。テストの赤点も赤ってついてるでし

よ。つまりあれは「貴女は学費に見合った学習がで

きませんでした、赤字です」そういう意味での赤なの、あれは」

鏡「そうだったのか」

部長「違うぞ」

まどか「赤でも黒でも良いけど、卒業したくないなあ」

部長「入学したと思ったら、いつの間にか卒業。学

校なんて、そういうもんよ」

まどか「でも受験か。卒業の前に」

らこ「嫌、受験なんて。私家業のある家に生まれたかった」

鏡「カ」

部長「キ」

らこ「家の業のこと。カキクケコじゃないっての」
部長「カが出たと思ったら、もうキが色づく。季節

って、そういうもんよ」

らこ「ねえ、部長の中でそのフレーズ流行ってる

の?」

まどか「なんで家業のある家が良かったの？」

らこ「継げばいいじゃん」

鏡「短絡的だなあ」

らこ「あ、勘違いしないでね。これ別に、楽に職に

つけるからとかいう意味じゃないの。わざわざ将来

のこと考えて悩まなくて良いからってこと」

部長「お前……自分のやりたくもない職を一生やら

される事になっても良いのか！」

らこ「どうせ色々な選択肢がある世の中になったっ

て、器用な奴が良い選択肢を持って行って、私たち

は余ったやりたくもない職をやらされるんだから」

鏡「まあねえ」

らこ「どうせ競走でしょ、差つけられて終わり、死

ぬしかないの」

部長「サをつけられたと思つたら、もうシが訪れ

る。人生って、そういうもんよ」

鏡「力なししいし、サびしいなあ」

まどか「さっきカの話してたけど、そろそろ出てる

よね」

鏡「夏か……」

らこ「来ないかもよ」

部長「『1999年6月の29日、かくいう我々も

夏への扉を探していた』夏は来る。必ず来る」

鏡「『部長はいつまで経っても、ドアというドアを

試せば、必ずその一つは夏に通じるという確信を捨

てようとはしないんだ』」

まどか「『そもそもちろん、私は部長の肩を持つ』

けどね。海、プール、山、BBQ……青春の季節だ

ね」

鏡「変だな」

まどか「何が？」

鏡「どうして青春の季節は、春じゃないんだろ」

まどか「そういえばそうだね」

らこ「それも競争社会でしょ。春は夏に競り負けたの。そして青を夏に奪われ、春はピンクを引き受けた」

鏡「世知辛いなあ……そういえば、絵筆は？」

部長「ピアノじゃないのか。俺らが無駄話してる間に、今日分の作業は終わらせたらしい」

まどか「偉いなあ」

らこ「終わったらこっちの仕事手伝えれば良いじゃん」

鏡「お前、嫌な上司になりそうだな」

らこ「私東京行ってめっちゃ働くから」

まどか「ここで就職しないんだ」

らこ「絶対嫌……この街で働く大人は延々と同じこ

とばっか言ってるんだから。ネギ。米。ネギ。米。ネ

ギ（だんだん早くなって）ネギ、米、ネギ、米、ネ

ギ、ネギ米、ネギ米ネギ米ネギ米ネギ……あと何の

話してる」

鏡「玉ネギ」

らこ「そう玉ねぎ。ダサイ、絶対やだ。私、同じ食べ物つくるならこういうのが良い」

らこ、パンケーキを取り出す。

部長「あ、ホットケーキ」

らこ「パンケーキ、ね」

部長「ホットケーキでも良いだろ」

らこ「全然違うの！」

鏡「どう違うんだよ」

らこ「いや……それはわかんないけど……」

まどか「ホットケーキとパンケーキ、同じものなのにどうして呼び方が違うんだろうね」

らこ「違うものだから」

部長「同じだって言ってるだろ」

らこ「全然違う！！」

部長「同じだよ」

まどか「同じって事は……ホットとパンがⅡだって

事だね」

らこ「ホットとパン……何、ホットとパンって」

鏡「ホットパンツ」

らこ「いや、確かに思い浮かんだけど」

まどか「ホットパンツって寒くない？ホットじゃないよね」

いよね

らこ「あんなに短いもんね」

鏡「ホットパンツはね、それを履いて街を歩くと熱

い視線に晒されるからホットパンツって言うらしい

よ

らこ「なんでそんなの知ってるの。気持ち悪い」

鏡「良いだろ、別に…」

まどか「だったらホットパンツは誰かの視線無しに

はホットパンツで居られないって事？」

部長「そう。誰かの視線無しにはアイデンティティ

を保てない哀れな存在なのだよ」

らこ「でもそういうものじゃない？誰だって、他人

がいて、自分を見ていてくれないと自分でいられない

い

まどか「ホットパンツはタンスにしまわれている時

はホットパンツでいられない。何故なら熱い視線が

ないから」

鏡「コールドパンツ」

らこ「熱くもあり、寒くもあるのね」

まどか「全然違うものなのに、イコールって事ね」

部長「だったら、パンケーキとホットケーキが全然

違うものであり、かつ同じものでも良いってこと

だ」

らこ「えー、そうか？」

まどか「hotとcold、真逆のものが同時に有り得る

ならそういうことになるね」

らこ「矛盾じゃん。冷たい火傷みたいなものね？そ

んなの有り得る？」

部長「メタンハイドレートという物質は別名『燃え

る氷』と呼ばれてるんだぜ」

鏡「ほら。たとえ裏と表のような存在でさえ、両立

できるってこと。そもそも似てるものなら尚更」

らこ「ホットケーキとパンケーキも？」

鏡「そう」

まどか「なら、この美味しいお菓子の『裏』をホッ

トケーキと、そして『表』をパンケーキと呼ぶこと

にしよっか」

部長「裏と表……他に何かある？」

鏡「夢と現実？」

らこ「ああ、それはきっと面倒くさい話ね」

鏡「面倒くさい話はやめよう」

まどか「ああ……でも、さっきの話だと、面倒くさ

いって事と面倒くさくないって事は両立できるのか

な？」

らこ「ああもう“めんどくさい”……！」

鏡「“めんどくさい”ね」

らこ「揚げ足取らないでよ！」

まどか「揚げ足って何だっけ？」

部長「フライドチキンの事だろ。なあ鏡。絵筆んと

こ行ってきても良いぞ」

鏡「え」

部長「いや、多分……絵筆も来てほしいと思うし。」

お前も行きたいんじゃないか」

鏡「あ、そう、じゃあ……」

鏡 はける。と同時にまどかが電

話を掛け始める。

部長「さて……どうする、俺たちは」

らこ「どうするって……」

部長「絵筆の事に決まってるだろ。他にないがあ

る」

まどか「でも私……引き渡すとか、嫌だな。絵筆ち

やんの事」

部長「当たり前だ。が、絵筆は恐怖の大王なんだ。

あいつが七月を過ぎても地球に残っていれば、人類

は滅亡するかもしれん」

らこ「あんた、まだそんな——」

部長「絵筆は恐怖の大王だった。人類滅亡も夢ではなく現実だ」

らこ「その前提が正しければ、の話でしょ……あの医者はそう言った、目羅は絵筆を殺そうとした。でも公理系が違えば答えも違う。それが数学でしょ、

部長」

部長「そう……だな」

電話先輩『あの医者と目羅が異常な妄想を信じるカルトの一員で、篠崎はそいつらに騙され自分こそ世

界に破滅をもたらす恐怖の大王だと思いきんでる頭の残念な奴だったでしょう。だが、篠崎がその異常

な妄想を理由に殺されそうになっていることには変わらぬ……だろ。少なくとも渡さない理由はある。ただ俺は……あいつが恐怖の大王、だということを疑っちゃいない』

らこ「なんで？」

電話先輩『オットセイの噂だ』

らこ「……もういい」

まどか「部長、ロケットを飛ばすの？」

部長「ああ。何より絵筆自身が、それを望んでる。

なら——」

まどか「でも…そしたら絵筆ちゃんは多分帰ってこ

ないよね。私たちが指示したところで離陸したら、

操縦桿を握ってるのは私たちじゃなくて絵筆ちゃん

だもの。絵筆ちゃん…帰ってこないよね」

電話先輩『だろっな』

まどか「わかっててロケットを飛ばすの？それは…

…殺すのと同じじゃない。それに、もし帰ってきて

くれたとしても、きっと捕まっちゃう」

部長「それでも俺たちにはその選択肢しかないだろ

う。賭けるしかない。絵筆は本当に恐怖の大王で、

ロケットの中で生きていくことができ、そして世界

は終わらない。そしていずれは…あいつが帰って

くる。そこに、賭ける」

らこ「そんな無謀な賭け……無理よ。これは夢じゃない」

部長「そう、現実だ。……無謀な賭け、勝ちに行こう」

絵筆、ピアノを弾いている。鏡が入ってくる。

絵筆「あ……」

鏡「どんな感じ？」

絵筆「……良い。ねえ、鏡くんは七月の人類滅亡、信じてる？」

鏡「……うん。根拠は自分でもよくわかんないけど。多分このままだと、そうなる気がする。そういうのって、突然来るもんじゃない？……篠崎は？」

絵筆「……わかんない」

鏡「部長はそれを止めるためにロケットまでつくってるんだもんなあ。しかもパイロットは絵筆。重大任務だ」

絵筆「でも……私出来るよ」

鏡「そっか。……何かさ」

絵筆「うん」

鏡「篠崎に何か……言う事があった、気がするんだ

よ」

絵筆「……そう」

鏡「篠崎と俺ってさ、前も一緒に……ピアノを弾い

てた？」

絵筆「……ううん」

○発射場

鏡「そっか。……だよね」

絵筆「それ、弾いてて良いよ」

鏡「え」

絵筆「弾いてて」

絵筆、教室を出て発射場へ。

らこ「あれ……ピアノは」

絵筆「鏡くんが弾きたいって。だから」

まどか「どうかした？」

絵筆「みんなに頼もうと思って」

部長「どうした」

絵筆「えっと……」

少し沈黙。

絵筆「私のせいで人類が死ぬ。鏡くんが死ぬ。世界の終わりが来る。それは昨日聞いたと思うけど……」

だから私はパイロットをやる」

らこ「でも……！」

絵筆「鏡くんに、死んで欲しくない」

らこ「あいつだって、同じこと思ってるでしょ……」

部長「！」

部長「絵筆。俺たちはお前に死んでほしくない。お前が逃げ出したいなら手伝う。なんだってする。……」

……その上で、絵筆……俺たちはどうすれば良い」

絵筆「ロケットに乗る。私はもう、ここにはいられ

ない」

部長「……なら、そうしよう」

らこ「部長！」

部長「鏡には、やっぱり——」

絵筆「言わないで」

部長「……そうだな」

絵筆「ありがとう」

らこ「それで良いの……？なんで人類全体の為に人が犠牲になんなきゃならないの？それって良いの？そんなの……」

まどか「らこちゃん。絵筆ちゃんが、そう選んだんだから」

らこ「でも……」

鏡、教室に来る。

らこ「あ……」

鏡「？今、なにしてんの？」

部長「今から打ち上げに向けての決意表明を、絵筆がしてくれるところだ」

絵筆「えっ」

まどか「どうぞ、絵筆ちゃん」

絵筆「あ……えっと……」

全員が注目。

鏡「来るって？」

絵筆「絶対……絶対、飛ぶから」

絵筆「発射当日」

全員が拍手。盛り上がる。

鏡「来ると思うよ。……あ、電話先輩はどうか。

絵筆「鏡くん」

来ますか？」

鏡「？」

電話先輩『え……外なんか出たら死んじゃうぜ。他

絵筆「ロケット乗って、飛んで、メッセージ送って

人の視線に耐えられん。いつも通り、こっから聞いて、こっから見てるよ』

……恐怖の大王、私が追いつくから」

鏡「任せた！」

絵筆「そっか」

絵筆「……皆来る？」

電話先輩「ま、いるようなもんだよ」

部長「じゃ……作業にするか。時間がとにかく足らんからな。じゃあ……まず買い出し行くぞー」

部長とまどかと鏡と絵筆、話しながら出ていく。らこ以外の全員、

発射場から出ていく。

電話先輩『いってらっしやい……ん？何だお前、

いかないのか』

らこ「なんなの。なんであんなにけろっと受け入れられるの」

電話先輩『皆いろいろ思うところはあるだろうさ。あ

っけらかんとしてるように見えても、内心はわからんだろう？』

らこ「でも……」

部長が呼ぶ声

電話先輩『行けよ』

らこ「私……絶対納得なんかしないから」

らこ、はげようとする。

電話先輩『らこ、電気』

らこ「ああ……」

照明消える。

電話先輩『待って』

らこ「？」

電話先輩『豆電球は点けといて』

らこ「(笑いながら)なに言ってるのよ。あんたこ

こにいないのに」

電話先輩『そうだな。……お前、なんで天文部にい

るんだ?』

らこ「だって、毎日楽しいから」

電話先輩「……良いな」

小さい照明に照らされる電話。数

秒後、照明消える。

【第七場 ↓エレベーター】

イメージシーン。発射の準備作業

をする天文部員。全ての準備が整

う。

部長「では、三日後だな。三日後、六月二十九日。

恐怖の大王が接近し地球に降臨するギリギリにこい

つを飛ばす！……それまで、休み！諸君のこれまで

の尽力に感謝する！！」

らこ、まどか、部長は何か話しな

がら発射場を出ていく。鏡もそれ

に続こうとするが、絵筆に引き止

められる。

絵筆「明日の朝、暇？朝、九時」

鏡「え、うん」

絵筆「ピアノ……聴いてくれない？少し上手くなっ

た。アドバイスが……欲しいから」

鏡「ああ……良いよ」

絵筆「ありがとう」

絵筆、はける。

鏡「明日の朝……」

椅子に座り込んで頼杖をつく鏡。

電話先輩『お前、帰らないのか？』

鏡「うーん、いや。ちょっと疲れた。こんなになん

かしたの久しぶりだし」

電話先輩「朝までいる気か？」

鏡「いや、さすがに帰るよ」

鏡、そのまま寝る。

電話先輩「おい？……結局寝るのかよ。なあ……も

う。鏡——」

突然電話が切られる。照明消え

る。エレベーターの到着音、部長

が勢いよく入ってくる。照明がつ

き、鏡が起きる。

鏡「あつやべ、寝た……」

部長「何時間寝た！？あれから何時間寝た！」

鏡「えっ……いや多分、二、三時間？」

部長「電話先輩と話したか？」

鏡「寝る前には……え、何？」

部長「らこからさつき連絡があった。電話先輩が消えたそうだ。部屋は無人、荒らされた形跡あり。確認するぞ」

部長、受話器を取りいくつかボタンを押す。

電話先輩『えー。ホテルニューカレドニア。五

泊。スイートルーム。ルームサービスあり。』

部長「……拉致された」

鏡「は……？」

部長「暗号だ。今のはそういうことだ。俺にも事情はわからん。聞くな。準備しろ」

鏡「どこへ」

部長「発射司令室だ。発射は三日後と言ったな。撤

回する。イレギュラーが起きた」

鏡「なんで、だってまだ……二十六日だろ？」

部長「だからイレギュラーが起きたと言ってるだ

ろ。俺たちは今から、あのロケットを打ち上げる」

鏡「篠崎が……乗るんだよな」

部長「そうだ」

鏡「本人は了承してんのか？」

部長「そうだ。安全を考慮してだ。次はお前か、俺

か。あるいは絵筆が消えるかもしれない」

鏡「少したじろぐ。」

部長「……なあ。二、三、質問をするぞ」

鏡「うん」

部長「お前、絵筆が好きなのか」

鏡「……多分」

部長「いつからそう思うようになった。お前とあい

つに、接点はなかったんだよな。それでも絵筆が、

好きなのか」

鏡「なぜかは俺もわからない。でも……俺は多分な

にか、色んなことを忘れてて……それで、俺は絵筆

が好きだ」

部長、相槌を打ちながらトランシ

ーバーを取り出して

部長『……鏡を回収した。どうぞ』

らこ『了解。こっちも篠崎を回収。今のところ問題は

無し。オーバー』

部長『……大丈夫か?』

らこ『オーバー、って。聞こえた?』

鏡 部長、エレベーターに乗る。

部長「本人に好きとは伝えないのか」

鏡「まあ、まだ」

部長「まだってなんだよ。宇宙に行ったら言えないぞ」

鏡「そうは言うけどさ」

部長「好きなら好きって言やあ良いだろう。直接が

嫌なら電話しろよ、電話」

鏡「伝達手段の問題じゃないよ」

部長「かの夏目漱石は『好きなんだ』とその一言を

言いたく無いがために『月が綺麗ですね』と遠回し

に言ったそうぞぞ」

鏡「そのエピソード、何かちょっと違うくない?」

部長「二十一世紀を迎える今、月は見るものではない

く行くものだ。そのセリフちと時代遅れすぎるよ

な」

鏡「いや、そうじゃなくて」

部長「「好き」か「月」か……どっちか絵筆に言うてやれ」

鏡、声にならないうなり声。

部長「今練習しとけよ」

鏡「なんでだよ」

部長「試験飛行をやらないロケットは落ちるぞ」

鏡「……じゃわかった。言うよ」

部長「ほーう、言え言え」

鏡、息を吸って。

鏡「……いややっぱ」

部長「ほら！言えって！今言え！すぐ言え！」

鏡「わかったって！言う言う！俺は絵筆が好きで

ず、はい！これで良いか」

途端にテンションが下がる部長。

若干引いている。

部長「……知り合いのそういうのを見るの、正直キ

ツイな」

鏡「だから嫌だって言ったじゃんか」

○指令室

指令室ではらこと絵筆が発射に使

う機械類のセットをしている。

らこ「あのさ……やっぱりやめた方が良いんじゃない

い？ロケット乗るの」

絵筆「何で？」

らこ「何でって……あのね、私が言うのもなんだけ

どき。いくら代々三十年かけて完成させたとはい

え、高校生の造ったロケットだよ。飛ぶと思う？」

絵筆「おもわないの？」

らこ「思わないってわけじゃないけど……正直半信

半疑。部長以外は大体そうじゃない？確かに実験も

繰り返してるし、私も天文部に入ってから色々勉強

したけど、理屈は間違ってると思う。もちろん、

素人のにわか知識だけど。でも……必ず飛ぶとはど

うしても思えない。信じられない」

絵筆「じゃあ、どうするの。もう聞いたでしょ。私

が地球で生き続けるだけで、人類を滅亡させるの。

貴女も死んじゃうんだよ」

らこ、少し笑う。

絵筆「……なんで笑うの？」

らこ「貴女も死んじゃう、って……あんたは鏡以

外、別にどうでも良いんじゃないの」

絵筆「まあ、そう」

らこ「やっぱり」

絵筆「でも別に……嫌いなわけじゃない、らこのこ

とも」

らこ「そうなの？へえ……あ（なにかに気づいた

顔）、やば。アイコン引き忘れた」

絵筆「それって、無いとまずいの」

らこ「まずいに決まってるでしょ、あれ無しで外出
たら恥ずかしくて死ぬ」

絵筆「『死』って、アイラインが無いこと？『アイ
ライン』って何？」

らこ「『アイ』＝視、『ライン』＝線。つまり視
線。視線が無いということが、死ぬこと」

絵筆「『アイ』、『死』……誰かの視線がないと、

『ー』は消えてしまう？」

らこ「そう。例えばそれは誰かの視線なしにはアイ
デンティティを保てないホットパンツのように。」

『eye』が無ければ『ー』が保てない」

絵筆「視線が無ければどうなるの？」

らこ「アイラインが無いと？」

絵筆「そう」

らこ「さっき言ったでしょ。外に出られないの、出

たら死ぬの」

絵筆 「電話先輩も、外に出たら視線があるから死んでしまおうと言ってた。さすが兄妹」

らこ 「あいつのはちょっと違う……出れないし、出たくないんだから。あたしは出たいのに、出れないの」

絵筆 「矛盾」

らこ 「実は私、矛盾が矛盾でない事を、既に知っているの」

絵筆 「ホットパンツは、コールドパンツ」

らこ 「あれ、知ってるの？冷たい火傷は？」

絵筆 「メタンハイドレート」

らこ 「そうよ」

絵筆 「視線がなければ死んでしまっし、視線があっても死んでしまっし……見られても見られていなくても死ぬなら、生きているものって何？」

らこ 「どちらでも無いものよ。見られるはずなのに、見られないもの。あるのに、ないもの」

絵筆 「透明人間」

「らこ」そんなものいる？」

絵筆「私の眼はだんだん悪くなってるの。そこにいるのに、皆が見えない」

「らこ」なるほど。それね」

絵筆「寂しい。目を閉じていても見えないし、開けていても見えない」

「らこ」でも、閉じてるときにはあれが見えるでしょ。

「らこ」真っ黒で……でも何かがある空間が」

絵筆「それ、宇宙？」

「らこ」「臉の裏は世界で一番小さな宇宙よ」

絵筆「なら、やっぱり誰も見えないよ。宇宙には誰もいないから。私は誰も見ることが出来ないし、誰にも見られない」

「らこ」「そう……ね。ねえ、やっぱりやめといたら。そんな、寂しいところへ行くのは」

絵筆「……でも、身体中から薬の臭いがするのほも嫌だから。ねえ、鏡くん、薬をお願い」

○発射場内の通路

らこ「……忘れるのは、何があったかだけじゃない。何で自分がそんなことまでしたか……それも忘れるんだよ」

部長、鏡、通路を歩きながら。

部長「おい、もう一回言えよ」

鏡「嫌だって。さっき引いてただろ。絶対言わな

い」

部長「言えってー言えー言っちゃえってー！」

鏡「わかった！わかったって！好きなんだって！絵筆——好きだ——これで良いか？」

部長「……」

鏡「だからさあ——」

歩いてそのまま反対側にはける。

らこ「馬鹿……」

絵筆「……私、やっぱり。鏡くん、全部忘れて、

生きて欲しい」

らこ「……」

絵筆「乗らなきゃ、だから。私がそうしたい、か

ら」

らこ「……あんたも、馬鹿だ」

絵筆「これ。……任せる」

絵筆、らこに薬の束をおしつけて

はける。

エレベーターが到着するSE。部

長、鏡が出てきて、指令室へ。全

員持ち場に着く。以下、ロケット

の発射シークエンスにおける台詞

は考証ののち調整する可能性あ

り。

【第八場 ↑ロケット】

○指令室

フタマルマルマル

部長「急遽予定を繰り上げ、本日二〇〇〇に本

基地が有するロケット『ルドルフ四号』を発射する

こととした。これよりミッション概要をもう一度確

認する。今回は「恐怖の大王」へのアクティブ

セ
テ
イ

S E T I だ。ルドルフ四号は軌道に入り次第メッセ

ージを発信。三百三十六時間以内に地球に変化が無

ければミッション成功と見做し、帰還とする。もし

その間我々の想定範囲内ないし範囲外のトラブルが

地球に発生し帰還不可能と判断した場合、パイロット

トは緊急用マニュアルに従え」

まどか、チェックリストを確認し

ながら。

まどか「パイロットはコックピットに搭乗。指令室

とのコミュニケーションチェック、キャビンの漏洩

チェックはとも完了。サイドハッチ閉鎖済み」

部長「コックピットの電源は」

まどか「内部電源に。電圧正常」

部長「よし」

らこ、チェックリストを見なが

ら。

らこ「二十四時間以内の平均気温は5℃を上回って

る。現在の気温、20℃。最大風速は13.5メー

トル毎秒。降雨、稲妻、積雲いずれもなし」

部長「緊急着陸地は」

らこ「問題なし」

部長「よし、やるぞ……」

電話が鳴る。

部長「電話先輩か!？」

らこが振り向く。部長が受話器を

取る。らこが受話器を奪い取る。

医者『本当に良いの?』

らこ「あんたか……!」

医者「あ……お兄ちゃん、どこ行っちゃったんだろ

うね」

らこ「(動揺しながら)知らない……あんな奴」

医者「そう?」

部長、らこの様子を見て電話を奪

い返す。

部長「持ち場戻れ！……何の用だ」

医者「別に？思い出づくりに入れて欲しいなあと思

って」

部長「お前なんぞ入れてやらん」

医者『えー。じゃあ加部ちゃんを入れてあげてね。

絵筆ちゃんのとこに行ってもらったから』

鏡、絵筆に通信する。

鏡『絵筆、大丈夫！？』

絵筆『うん……まだ来てないみたい』

部長「鏡！集中しろ！急ぐぞ」

らこ「ああもう……！！」

サイレンが鳴る。

医者『私もそっち、行っちゃおうかなあ』

電話が切れる。

らこ「やっぱ無理じゃない……！あいつら出し抜こ

鏡「大丈夫だよ」

うなんてそんな夢みたいな事出来やしない、これが

らこ、鏡から目を逸らす。

現実なのよ……」

らこ「……とにかく早く飛ばさないと」

部長「確かにこれは夢じゃなく現実だ！が、夢にも

投光器が教室を照らす。

思わないことが起きるのはいつも現実なんだ、諦め

まどか「発射まであと十六秒」

んな」

システムボイス、カウントを開

らこ「けど……」

始。以下、台詞の合間に適当に口

鏡「らい」

ケットの駆動音や発射音、振動音

らこ「え？」

などを差し挟む。

部長「特別弁解放！長柄ダムより放水開始」

らこ「ターボポンプ作動確認」

まどか「第一エンジン点火」

らこ「全て離翔位置です」

まどか「固定ロケットブースター点火」

部長「離翔！」

曲のタイミングに合わせてロケッ

ト発射。MEカットアウト。

まどか「メインエンジン、104から67に」

らこ「104に復帰、固定ロケットブースター分離

成功」

絵筆『軌道速度に入った』

部長「って、事は……！」

らこ「……成功した！」

鏡、らこ、まどか、部長、互いに

顔を合わせ満足気な笑みを浮かべ

るが、鏡を除いてすぐに複雑な表

情に。

部長「まだ早い、加速度のG保て」

まどか「メインエンジン出力抑制……67」

らこ「MECO（メインエンジン停止）」

部長「起動操作エンジン噴射……」

各種噴射音、駆動音、振動音など

が小さくなっていく。絵筆から鏡

に通信が入る。

絵筆『鏡くん』

鏡『あ……絵筆。どう、そっちは』

絵筆『大丈夫』

鏡『そっか、良かった』

絵筆『あの、私ね』

鏡『うん』

絵筆『いつも望遠鏡をのぞいて、宇宙に行けたらま

ずは何を見ようかって考えてたの』

鏡『決まった？』

絵筆『ううん、これから考える。だって……先は長

いでしょ』

鏡『何言ってるんだよ。メッセージ送ったらすぐ戻っ

てくるだろう？』

鏡『……ねえ……鏡くん、なにが言う事、ない』
鏡『言うこと』

絵筆『でも……居心地良いんだ。ここ』

絵筆『そう』

鏡「そっか……ねえ、もしミッションが失敗して、

鏡『……ある』

人類が滅亡しちゃったとしてもさ。……身勝手な話

絵筆『聞きたい』

だけどさ、絵筆には生きていて欲しいんだ。生きて

鏡『あの、絵筆……す……つ、月が……月が綺麗で

さえいれば必ず——』

——』

絵筆『何で？』

音声「が乱れる。

鏡『え』

システムボイス『通信圏外です』

鏡「あ……」

らこ「鏡」

鏡「え？」

らこ「ばーか」

鏡「帰ってきたら言うよ」

らこ「……あ、そ」

鏡「ちょっと、発射場行ってくる」

らこ「え、なにしに」

鏡「加部さんいるかもしれないし……俺、まだあそ

こでなにかやることある気がして……」

まどか「じゃ、私も行こうかな。写真撮るときたい

しね」

鏡、まどか、出ていく。

らこ「絵筆にだけは生きていて欲しいんだ……っつて

さ」

部長「言ってたな」

らこ「絵筆だったって事ね。私じゃなくて……」

部長「世界が終わっても生きて欲しいのは絵筆かも

しれんが、世界が終わるとき一緒にいたいと思って

るのは、お前なんじゃないのか」

らこ「え……なにそれ」

部長「知らん。格好つけて言ったただけだ。……これ

からどうする」

らこ「どうするって……別に、今までと変わらない

暮らしが続くだけでしょ」

部長「どう思う。鏡に……本当の事、言うべきだと

思うか」

らこ「あんたが知らないうちに、あのロケットを打

ち上げる目的は変わった。篠崎絵筆こそが人類と世

界を終わらせる原因、恐怖の大王で、私たちはあい

つを宇宙の果てに放り出したんだ……って」

部長「時間の問題だろ。あいつが消えた以上、おそ

らく人類は滅亡しない。絵筆を無意味に宇宙へ送っ

ちまったなんて思ったらそれこそ取返しつかないト

ラウマものだ。全部一から説明しないと……まあ、

その時は俺が言うさ。部長だし」

らこ「いや、いいよ……あいつにキレられたり、泣かれたりするの、苦じゃないし」

部長「だが……」

らこ「憎まれ役、引き受けるから」

部長「嫌われるぞ。鏡に」

らこ「言わなきゃ、だから。私はそうしたい……か
ら。でも、ちょっとだけ時間が欲しい」

部長「時間、か」

らこ「私……あいつの為に自分を傷つけられるくらいには大人だと思ってるけど。あいつの為にあいつ自身を傷つけられるほど……まだ大人じゃないから」

部長「……そろそろ、長袖だと暑いだろ」

らこ「うん……そうだ。変わる事、一つあった。

私、半袖にしようと思う。明日からとかは、まだ無理だけど」

部長「……そうだな」

部長、はける。らこ、それに続く

うとして止まり、ポケットから絵

筆から渡された薬の束を取り出

す。捨てようと逡巡するが、再び

しまつてはける。

鏡、発射場に入ってくる。後から

まどかも。既に加部がいる。

加部「！鏡くん……」

鏡「どうも……止めなかったんですね」

加部「ええ。でも……後悔は無いですよ」

電話がなり始める。鏡と加部、警

戒しながら電話を見る。まどかが

とる。

【第九場 発射のあと】

○発射場

まどか「もしもし？」

電話先輩『ああ、まどかか……』

まどか「やっぱり。電話先輩……私たち、ロケット

飛ばしちゃったんです。明日からここに来る理由

は、もう無くなってしまった」

電話先輩『おしまい、か』

まどか「はい。それに……絵筆ちゃん一人がいなく

なって……もう私たち、前みたいに話せるかわから

ないですもん。何もかも変わってくんですよ……電

話先輩は、どうするんです？」

電話先輩「ロケットなら、また飛ぶさ」

まどか「かもしれないね。……さよなら。でもも

しかしたらまたいつか」

電話先輩「……ああ。鏡に、変わってくれ」

まどか、受話器を渡す。

鏡「電話先輩！？無事なんですか」

電話先輩『ああ……だけど、わからないだろ。お前

は俺の声しか聞いたことないんだ。いなくなったと

して、それがお前にわかるのか？』

鏡「え……？」

電話先輩『わからないだろ。まあ俺のことは良いん

だよ。篠崎絵筆の、話をしよう』

鏡「絵筆……そう、だんだん思い出してきた……で

も多分大事なことは、まだ、何も——」

電話先輩『篠崎が何者かは聞いたか』

鏡「え。いや……」

電話先輩『いきなりな話かもしれん。急には飲み込

めないだろう。きっと、後からお前には——』

まどか「らこちゃんが話してくれますよ」

電話先輩『……かもな。結局あいつは、少しのあい

だお前が傷つかないようにしただけ。でもいつまで

もそうしちやいない。きっとすぐに事の顛末を全て

伝える。そうしたら——』

まどか「でも、私はどっちでも良いと思うんです」

加部「彼女が結局、本当のことを何もかも言わなか

ったとしても？」

まどか「はい。どちらでも、あまり変わらないっ

て」

電話先輩『パンケーキとホットケーキが同じお菓子

であるように、か』

まどか「燃える氷が確かにあって、冷たい火傷をす

るように」

鏡「……月を語ることが、好きと語ることであるよ

うに」

まどか、満足そうにうなずいて去

っていく。鏡、発射場を名残惜し

そうに見たあと、それに続く。加

部がそれを目で追うと、医者が入

ってくる。

医者「加部ちゃん」

加部「あ……」

医者「悪いね。色々」

加部「本当ですよ。私の仕事は目羅さんの死に関わ

っている正体不明の薬はなんなのか……それだけだ

ったのに」

医者「そもそも、その情報って誰が流したんだらう

ね。麻取も無視した件をわざわざ掘り返して。ね

え、「十分信頼に足り、確かなルート」って、結

局？」

加部「悪い」

医者「へ？」

加部「たった一文、それだけ書かれたメールです。

そこには添付ファイルがついていて、薬の他にも今

回の事件に繋がるヒントがあった」

医者「へ？」

加部「信頼性なんて何も無い……でも、なんか、真

に迫るものがあつた。だから確信がありました。結

果……事態はこう展開した」

医者「……良い性格してるう」

加部「あの情報が無ければ、今回のことは単なる一

教師の不審死で終わっていた。篠崎さんも予定通り

処分されていた……んですかね」

医者「……鏡くんもあっさり捕まっていた、か」

加部「今後は、どうするんです？」

医者「この仕事はやめる。十年近く面倒見た子供を

宇宙に放り出す仕事なんて……そんなのこれ以上や

ってらないつつーの。……多分、目羅だって似た

ようなこと思ってたんじゃないのかね」

加部「では、次のお仕事は？」

医者「どうしようかなあ」

加部「……薬剤師免許、持ってます？」

医者「あるよ。医師と薬剤師、ダブルライセンス」

加部「麻薬取締官……興味ありません？」

医者「……マジ？」

蝉の声。ロケットの轟音

絵筆（独白）「その瞬間夏が来た。いや、本当はも

っと早くに来ていたのかもしれないけど、私は気づ

いていなかった。決して地上では聞こえなかった蟬

の声は、高度何千、何万メートルの世界で近く深く

聴こえた。鏡くん、地球を覆う雲は黄色く染まって

います。世界中のビルの明かりが、反射しているの

かもしれません」

【第十場 失われた宇宙飛行士】

薄暗い照明。何千年も経ったあと

の指令室。通信機に灯りがついて

おり、起動している。

システムボイス『ペイロードベイドア閉鎖完了。軌

道制御用エンジン作動します。減速開始。通信シス

テム起動。コントロールセンターに繋がります』

絵筆『……よし』

システムボイス『北緯35度26分0秒 東経14

0度17分8.76秒 北緯35.4333度 東

経140.2857667度。日本・千葉・茂原

市・茂原第三高等学校天文部発射指令室。コントロ

ールシステム・オールグリーン』

絵筆『……CQ。こちらルドルフ4号。応答願います………』

絵筆『CQ、CQ。こちらルドルフ4号、応答願います………』

ピーツというSE。

システムボイス『応答ありません。通信を切断します』

絵筆『……そりゃそうか。……鏡くん。私のこと、

聞いた？聞いたよね。きっと、最後には話したと思

います。気に病んだかな。でも私、全然後悔してない。それに、地球の外は本当に……ごめんね、上手

く言葉に出来ないけど。臉の裏より、本物の宇宙は凄かった。……二十一世紀はちゃんと来た。その先

も、その先も来たんだ。その先もその先もその先も。地球……もう人なんて誰も住んでないだろう

な。でも私はこっちの地球の方が好き。黄色い雲に覆われた青い地球はなんだかいたたまれなくて、嫌いだった。……そうだ、出発の時、何か言ってたよ

ね。鏡くん、月が……うん。地球が、綺麗です

ね』

暗転。同時にカテコ曲流れます。

カーテンコール

鏡が教室に入ってきてお辞儀、机

に座ってどこか見ている。目羅、

加部と医者、部長とらこ、まどか

の順に登場。部長は電話をしながら

ら入ってくる。らこは半袖に。ま

どか皆の写真を撮る。

舞台上にいる全員がはける。医者

が少し名残惜しそうにするが、加

部に促される。絵筆が入ってく

る。鏡は思わず立ち上がる。包帯

などが全て外れ、髪も黒くなった

絵筆がいる。絵筆が笑顔で鏡に

駆け寄り、全ての照明が消える。

終劇